

## 【資料紹介】

## 西南学院大学博物館所蔵「聖ロクス像」

下園 知弥

## はじめに

西南学院大学博物館所蔵の「聖ロクス像」は、同館が所蔵する計9体の「サント」(Santo)のうちの1体である<sup>1</sup>。サントとは、フィリピンにおける信仰的・民芸的伝統のなかで生まれた木彫ないし象牙彫の聖人像であり、フィリピン人信徒たちの信心の対象となっている「信仰の道具」の一種である。今日ではその歴史的・芸術的価値のゆえにアジア内外のコレクター・美術研究者たちの関心も徐々に集めるようになってきているが<sup>2</sup>、その一方で、我が国においては未だサントという歴史資料ないし芸術作品の知名度は皆無に等しく、サントをテーマとする展覧会もほとんど開催されていない<sup>3</sup>。むしろ、研究もほとんど進んでおらず、関連研究としてサントにまつわるフィリピンの宗教文化であるところのカトリシズムないしフォーク・カトリシズム<sup>4</sup>に関するいくつかの論文が著されているのみである<sup>5</sup>。このような我が国の状況に鑑みると、国内でサントを所蔵している稀有な博物館として、サントについての基本的な情報を提供することには相応の意義があると言えよう。

サントという歴史資料ないし芸術作品についてはほとんど知られていない一方で、「聖ロクス」という聖人については、我が国でも西洋美術研究者を中心としてある程度知名度があると考えられる。というのも、聖ロクスはキリスト教の聖人の一人であり、ある時はペストをはじめとする伝染病の守護聖人として、ある時はかの聖人に捧げられた教会の名称として、ある時は美術の主題として、聖ロクスの名前や姿を目にする機会が多いからである。とりわ

け、新型コロナウイルス感染症が流行している2020年現在、聖ロクスへの信心はカトリック文化圏を中心に再び注目を集め始めている。したがって、聖ロクスについての情報を提供することもまた、今日的な状況に照らして一定の意義があると思われる。

本資料紹介は、上記の事情をふまえた上で、次の三つの問いに答えつつ西南学院大学博物館所蔵の「聖ロクス像」について紹介したい。第一に、聖ロクスとは何者なのか。また聖ロクス崇敬はどのように始まり展開していったのか(1章および2章)。第二に、サントとは何か。その起源と造形的特徴について(3章から5章)。第三に、西南学院大学博物館所蔵の「聖ロクス像」にはどのような特徴が認められるか(6章)。

## 1. 聖人伝における聖ロクス

「聖ロクスとは何者なのか」という問いに対して、まずは辞書的な回答から確認してみたい。聖人研究の碩学である Donald Attwater は *The Penguin Dictionary of Saints* において次のような情報を提供している。

Rock 癒し手、14世紀、祝祭日：8月16日

聖ロクスはラングドックのモンペリエの生まれで、北イタリアで感染症が流行中であった時分に病者を癒した人物とされている。その伝説によれば、彼はペストが流行し始めていた時にローマへ巡礼に出ており、行く先々で超常的な仕方によって患者を癒していた。また、ピアチェンツァで彼自身が病に侵された際には、最

初に一匹の犬が彼を救護したと言われている。回復してから無事故郷に戻ってきた聖ロクスは、親族からロクスだと認識されず、〔ロクスの〕偽物として牢に繋がれ死んでしまった、とされている。別の資料では、この出来事が起きたのはロンバルディアで、かの地で彼は密偵と誤解されてしまった、と言われている。聖ロクスは今日でもフランスにおいて身体的な病に対する救いを求めて祈願されており、イタリアでもサン・ロッコ (San Rocco) として祈願されている。その名前はしばしばRochと表記される。芸術においては、しばしば犬を連れ添った姿で表象される<sup>6</sup>。

上述の情報は、多くのキリスト教辞典・聖人伝が共通して紹介しているところであり、聖ロクスについての一般の見解であると言えよう。このような聖ロクス観は、中世後期以来の諸聖人伝を典拠として確立したものであり、代表的には *Vita sancti Rochi* (Francesco Diedo著、ミラノ、1479年、ラテン語)、*Die Hystory von sant Rochus* (著者不詳、ウィーン、1482年/ニュルンベルク、1484年、ドイツ語)、*Acta Breviora* (著者不詳、ケルン、1483年/ルーヴェン、1485年、ラテン語フラマン方言)、*The Golden Legend or Lives of the Saints* (Jacobe de Voragine原著、William Caxston編訳、ロンドン、1483年、英語)、*Vie et légende de msgr. saint Roch* (Jehan Phelipot著、パリ、1494年、フランス語)、*Vita sancti Rochi* (Jean de Pins著、ヴェネツィア、1516年、ラテン語) などが聖ロクス伝ないしそれを収録した書物として知られている。

聖ロクスという聖人を知る上で、これらの聖人伝が持つ情動的価値は極めて大きい。というのは、今日私たちがかの聖人について有しているイメージのほとんどは、これらの聖人伝の記述ないしその記述を元にした視覚芸術に由来して作り上げられたものだからである。聖ロクスのイメージ確立に寄与した聖人伝の記述の例として、キャクストン版『黄金伝説』<sup>7</sup>のエピソードをいくつか引用してみよう。

### 【誕生と十字架のしるし】

聖ロクスはフランスの国境上に位置する大都市モンペリエの生まれで、高貴な家系の子孫であった。彼の父はヨハネ (John) という名のモンペリエ領主であり、フランスの高貴な家の出であった。かの父は高貴な生まれであり恵まれた領主であったけれども、極めて謙虚な徳の持ち主であった。父が娶った近縁の高貴な身分の妻は、リベラ (Libera) という名の美しい容貌の女性であり、二人はともに我らが主イエス・キリストへ敬虔に仕え、神への愛と聖なる業の内に過ごしていた。そうして順調な生活を長く営んでいたが、彼らは世継ぎの子に恵まれず、そのため彼らはしばしば祈願し、巡礼の誓いを立てていた。そしてある日、特別なことが起こった。我らが至福なる貴婦人 (聖母マリア) へ子を授かるようにと妻が熱心に祈りを捧げていると、観想の状態に没入し、そこで彼女は天使の声を聞いた。「おお、リベラよ、神は汝らの願いを聞き入れてくださった。汝らはその請願に対して神の恩寵を授かるであろう。」それから直ぐに、彼女は夫のもとに行き、天使から聞いたことを彼に話した。そうして彼らが喜びに溢れつつ夫婦の営みを終えると、彼女は子を孕んだ。その時授かった子は、その洗礼の際にロクス (Rochus or Rocke) と名付けられた。このロクスは左肩に十字架のしるしが刻まれており、それは彼が神の寵愛を受けし者であることのしるしであった<sup>8</sup>。

### 【巡礼とペストの癒し】

そしてロクスは、父に命じられたことを終えると、故郷のモンペリエを去って種々の巡礼に出ることを宣告した。そして彼は、巡礼の衣を纏い、帽子を被り、巡礼印を肩に着け、右手に巡礼杖を持ち、出発した。

それから多くの砂漠を経て、彼はローマへとやってきた。ラテン語でアクアペンデンス



(Aquapendens) と呼ばれるペストが蔓延していた街に入ると、旅の途中で多くのことを聞き及んでいたロクスは、望んでかの街の病院へと向かった。滝の池 (Water-hanging) と呼ばれるその街の病院には、ウィンケンティウス (Vincent) という熱心な祈り手・働き手がいて、彼はその病院を管理しており、日夜そこで病人たちに仕えていた。ウィンケンティウスは若く華々しい男であるロクスがペストに罹患してしまうのではないかと怖れたが、やってきたロクスが病める者たちをキリストの名において祝福し、彼らに触れるや否や、病める者たちは全快した。そして彼らは直ぐに、聖なる人ロクスがやってきたのだ、と告白した。彼らは皆、ペストの猛火に侵されて悩み苦しんでいたが、ロクスはすべての病院を訪問して、その猛火を打ち消し、病から救っていった。かの街を出ていった後も、ロクスはペストに罹患している家々に入ってゆき、十字架のしるしとイエス・キリストの受難の思い起こしによって、すべての者をペストから救い出した<sup>9</sup>。

#### 【ゴットルドの獵犬】

その木の近くには小さな村があり、そこには貴族たちが住んでいた。彼らの中にはゴットルド (Gotard) という神に愛されし者がいて、彼は大きな農場と世帯を有していた。このゴットルドは多くの獵犬を飼っていたが、そのうちの一匹は彼に非常に懐いていて、食卓から堂々とパンを運び出すことができた。そしてロクスがパンに欠いている時には、その獵犬が、神の遣わしによって、主の食卓からロクスの元へとパンを持ってきたのであった<sup>10</sup>。

#### 【投獄と帰天】

それから聖ロクスは、悔い改めの巡礼として、神への愛に燃えつつ、故郷へと向かうことにした。そしてアンブレリアと呼ばれるロンバルディアの領地にやってきて、かの地の領主が

戦争をしていたアルマンへ向かわんとしたが、そこで聖ロクスは領主の騎士たちに密偵として捕らえられ、裏切り者として彼らの領主のところへ連れていかれた。常々イエス・キリストへ信仰告白していたこの至福なる聖人は、〔イエスの〕代理人となって狭く苦しい牢獄へと入れられて、喜んで苦痛を身に受けた。その牢獄で彼は日夜イエスの名を記憶し、かの牢獄が彼の信仰を損なわせることなく、しかし荒れ野に身を置き悔い改めをせんがためにその境遇が続いても良いということを神に祈るよう、自らに命じた。そして彼は、5年間、祈りのうちにその牢獄で過ごしたのであった。〔中略〕そして牢獄にやってきた彼ら (領主たち) は、聖ロクスがこの世を去ったことに気づき、また牢獄中がまばゆい明かりで満ちているのを見た。その光景は、彼らがかの人は神の友であったと疑いの余地なく信じるのに十分なものであった。彼の額には大きな蠟燭が燃えており、足にも同じものが燃えていて、その蠟燭によって彼の全身は輝いていたのであった。さらに、彼らがかの人の額に前述の表 (天使がロクスの臨終に際して刻んだ文字) が記されているのに気付いた。それによって彼らは至福なるロクスの名を知ったのであった。かの名は権威的な名として知られていたのであるが、それは、かの都市の領主の母は聖ロクスがモンペリエの領主ヨハネの息子であることをずっと前から知っており、かのヨハネと我々が語ったところのこの領主は兄弟だったからである。このような出来事が起きてしまったのは、彼らがロクスの名を知らなかったからであった。それから彼らは、聖ロクスに刻まれていた十字架のしるしによっても、彼が領主の甥であると知った。そのしるしは、以前に述べたように、彼がその母の胎より出てきた時から有していたしるしであった。それから彼らは、自らの行いを後悔し、深く嘆き悲しんで、終にはかの都市のすべての人々と共に聖ロクスを荘厳かつ敬虔に埋葬した。それからまも

なく、かの聖なる人は、教皇によって栄光の内  
に列聖されたのであった<sup>11</sup>。

これらのエピソードは、聖ロクスの伝承の中でも  
とりわけ有名な箇所であり、近代以降の聖ロクス表  
象の中核となっている。すなわち、これらの描写  
は、近代以降の諸聖人伝にも記され、祈禱文や絵画  
の主題にもなり、今日私たちが知る聖ロクスのイ  
メージの主要な源泉とされ続けている。

## 2. 西欧における聖ロクス崇敬の伝統

上記のキャクストン版『黄金伝説』における聖ロ  
クス伝は、先行する諸聖ロクス伝を源泉として記さ  
れたものであるが、聖ロクス伝の起源と伝承過程に  
ついては諸説ある。聖ロクス研究で一般に認められ  
てきた定説<sup>12</sup>では、14世紀末から15世紀初頭頃に原  
ロクス伝とも言うべき文書（現存せず）がまず存在  
し、この原ロクス伝に依拠して*Acta Breviora*、*Vita  
sancti Rochi*、*Die Hystory von sant Rochus*といった  
テキストが現存する初期の聖ロクス伝が著されたの  
だと考えられている。従来の説では、テキストが現  
存する最も古い聖ロクス伝は*Acta Breviora*であり、  
その執筆年代は1430年から40年頃と推定されてい  
たが、近年の文献学的研究によって諸聖人伝の執筆年  
代と相互関係が見直され、*Acta Breviora*の年代も  
大幅に年代が下るかたちで修正されている<sup>13</sup>。議論  
は継続中でありさまざまな説が唱えられているた  
め、確定的なことを述べるのは難しいが、いずれに  
せよ、聖ロクス伝が西欧世界で急速に普及したのは  
複数の訳が登場した15世紀最後の四半世紀以降のよ  
うである。したがって、この時代を聖ロクス崇敬の  
一つの転換点と見做すことができよう。

15世紀最後の四半世紀以前、すなわち聖ロクス伝  
の諸訳が西欧各地に広まる以前、この聖人に対する  
崇敬がどのように始まり広がっていったのかを詳細  
に知ることは難しい。というのは、14世紀末から15  
世紀前半にかけての聖ロクス崇敬の痕跡を示す資料  
は、史実か定かではない証言や記録に限られている

——あるいは、年代の確定をめぐって論争中である  
——からである<sup>14</sup>。15世紀後半になるとイタリアを  
中心として聖ロクスの肖像画や現存する聖人伝の写  
本が現れるようになるため、この時期までには聖ロ  
クス崇敬が西欧の民衆の間で広まり始めていたこと  
は間違いない。

聖人伝が普及して以降の聖ロクスに関する視覚芸  
術に注目すると、16世紀までには表象的伝統が形成  
されており、この聖人の図像にいくつかの典型的特  
徴を見て取ることができる<sup>15</sup>。

第一に、太ももの傷（黒痣）を露出した姿によっ  
てしばしば描かれる（図1）。この黒痣はペストに罹  
患した「患者」のしるしであり、「患者」としての  
聖ロクスは、この痣を指し示すことで、自らがかつ  
てペスト患者であったことを表しているのである。  
なお、天使がこの黒痣を治癒する様子が描かれるこ  
ともある（図2）。

第二に、都市のペスト患者たちを癒す「治癒者」  
としてもしばしば描かれる（図3）。その描写は先に  
紹介した聖ロクス伝の一場面、すなわち巡礼の最中  
に行った治癒の奇跡を描いたものである。また、ペ  
スト患者の治癒に際して聖母の執り成しを願う様子  
や聖ロクスの奇跡に助力する天使が描かれることも  
あり、癒しの描写にはいくつかのヴァリエーション  
が見られる。

その他には、「巡礼者の装い」や「同伴する犬」  
（ゴットルドの獵犬）なども聖ロクスの図像的特徴  
として挙げるができる（図4）。これらの特徴も  
また、聖人伝の描写に基づくものである。そしてこ  
れらの図像的特徴の多くは、フィリピンにおける聖  
ロクスのサントにもそのまま継承されている。

## 3. フィリピンにおけるサント崇敬の起源

元々はイスラーム教が広く信仰されていたフィリ  
ピンにキリスト教が到来したのは、1521年、セブ島  
の港へマゼラン船団が来航した時のことである。こ  
のスペインの船団を率いていたフェルディナンド・  
マゼラン（Ferdinand Magellan, 1480-1521）は周





図1  
《聖ロクスと天使》  
1480年／バルトロメオ・ヴィヴァリーニ／板絵



図2  
《聖ロクスと天使》  
1545年頃／マッテオ・ダ・ブレスキア／キャンバスに油彩



図3  
《ベスト患者をいやす聖ロクスと栄光の聖母》  
1575年頃／ヤコポ・バッサーノ／キャンバスに油彩

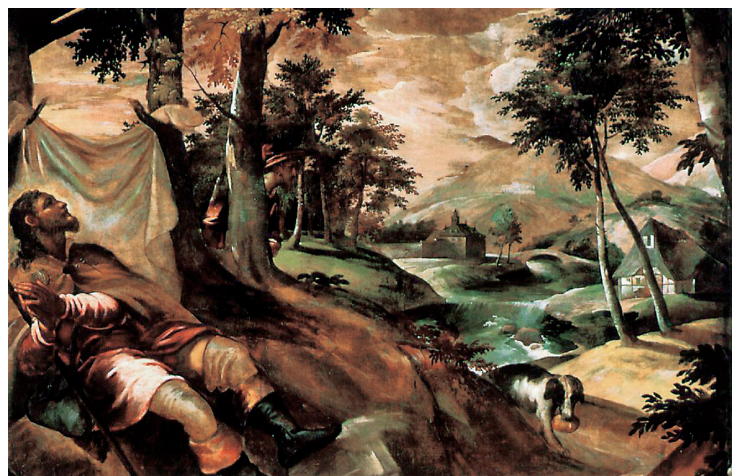


図4  
《天使に孤独を慰められる聖ロクス》  
1580年／パオロ・フィアミンゴ／キャンバスに油彩



知のとおり宣教師ではなく航海者であったが、キリスト教国からやってきた彼らは、キリスト教の信仰と文化を初めてフィリピンにもたらした。マゼランたちがフィリピンにもたらしたとされるキリスト教関連の文物の一つに、サント・ニーニョ（幼児キリスト）の像がある。同船団に乗船していた歴史家アントニオ・ピガフエッタ（Antonio Pigafetta, 1491-1534）は次のような証言を記している。

晚餐（昼食）の後、司祭と他の幾人かが女王へ洗礼を施すために浜辺へと行った。かの女王は40人の女性たちを従えてやってきた。我々が彼女を壇上まで案内すると、彼女は敷物の上に座らせられ、他の女性たちは彼女の側につき、司祭の準備が整うまでそうしていた。私は彼女に我々が貴婦人（聖母マリア）の像と非常に美しい木彫の幼児キリスト像、そして十字架を見せた。すると直ぐに彼女は懺悔を行って、そして涙を流しながら洗礼を請うた。〔中略〕彼女は我々に、偶像と取り替えるためにその小さな幼児キリストを自分にくれないかと頼み、そうして立ち去っていった<sup>16</sup>。

[傍点引用者]

この伝説めいた証言をそのまま信じることはできないが、フィリピンの人々がマゼラン船団の来航によってキリスト教の文物を目にし、何らかの印象を受けたのは事実であろう。なお、この時女王に贈られたとされるサント・ニーニョ像は1565年にセブ島へやってきたスペイン人たち（フィリピン総督ミゲル・ロペス・デ・レガスピの船団員）が現地の火事で焼け落ちた家屋より発見した像——それは土着風の衣服や装飾を飾り付けられていた——と同一視され、「セブのサント・ニーニョ」（Santo Niño de Cebu）として現在に至るまでフィリピン人信徒たちの崇敬を広く集めている<sup>17</sup>。

上記のエピソードは、フィリピンにおける「サント」（Santo）すなわち「木彫ないし象牙彫の聖人像」の伝統がサント・ニーニョ像から始まった可能

性を示唆している。とはいえ、この像よりも早く1512年にポルトガルの漂流民によって聖母マリア像が持ち込まれていたとする伝承<sup>18</sup>も存在し、セブのサント・ニーニョ自体の出自も定かでないことから、フィリピンにおけるサント崇敬の起源となる時期を厳密に確定することは難しい。確かなのは、16世紀にいくつかの聖人像がフィリピンに持ち込まれていたこと、そして続く世紀には現地の職人たちの手によって聖人像が掘られるようになっていたことである。

聖人像の伝来以降、サントの伝統確立に寄与したフィリピン人職人たちの技術は、主に二つのルーツが指摘されている。一つは、中国との影響関係の中で発展していたフィリピン独自の（あるいは中国とフィリピンの折衷的な）工芸文化である。たとえば、ルソン島のラグナにはパエテ（Paete）——鑿を意味するパエト（Paet）に由来する——という村が存在するが、この村は1571年に西欧人が訪れた時にはその伝統的な木彫技術で既に知られていた。また、象牙のサントの様式には中国的な要素が見られることから中国由来説も想定されうるものの、そうしたサントの大半もやはりフィリピン人の手によるものが大半であると研究者らは考えているようである<sup>19</sup>。いま一つのルーツは、西欧の職人たちがもたらした工芸文化である。たとえば、1581年にフィリピンへやってきたイエズス会士アントニオ・セデーニョ（Antonio Sedeño, 1535-95）ら宣教師たちが新しい木彫技術と聖人像の造形を伝えたことが研究で指摘されている<sup>20</sup>。したがって、フィリピンのサントは、技術的・表現的観点から言えば、西欧（特にスペイン）、中国、フィリピンの三つに起源を持つということになる。

#### 4. サントの様式的分類

サント研究の先駆者Ferdinando Zóbel de Ayalaは、「フィリピンのサント」（Philippine santos）を「スペイン統治の下、言い換えれば1565年から1898年の間に、フィリピンにおいて着彩され、彫刻さ



れ、成形されて制作された宗教的彫像」と定義している<sup>21</sup>。Ayalaがこのように時代を区切った理由としては、サントの本質をスペイン・カトリックとフィリピンの文化的結合に見ているからだと推測される。この定義をそのまま受容する場合、20世紀以降にフィリピンで制作された聖像を何と呼ぶべきかという問題が残るものの、この期間がフィリピンにおける聖像崇敬および聖像制作の最盛期であったことは間違いない。というのも、1898年はフィリピン独立革命の年であり、これと前後して教会でも改革運動や反教権主義（anticlericalism）の動きが生じているからである<sup>22</sup>。スペインからの独立を以ってフィリピンにおけるスペイン・カトリックの伝統が途絶えたわけではないが、独立を契機として信仰的関心の力点に変化していった——サントのようなスペイン・カトリック由来の信仰文化よりも「解放の神学」のような土着的・今日的問題へと関心の比重が移っていった——ことは確かである<sup>23</sup>。それゆえ、1898年をフィリピンにおける信仰文化の一つの区切りとするのは妥当であろう。

Ayalaはサントを定義しただけでなく、今日研究者の間で一般に認められているサントの様式的分類も試みている。その類型は、「民衆的」(popular)、「古典的」(classical)、「装飾的」(ornate)の三つである。以下、先行研究<sup>24</sup>に即しつつ、各々の様式の特徴を簡単に見ていきたい。

#### 【民衆の様式】

教育を受けていない彫像師の手による、洗練されていない様式。個人の家屋に備える目的で制作された私的信心のための聖像であると考えられる。個人の家屋に祀るためのものであるゆえにサイズは非常に小さく、彫像師に技量のゆえに彫刻しやすい木製の素材が選ばれ、はっきりとした（言い換えれば、粗野な）彩色が施されている（図5）。

#### 【古典の様式】

十分な技術を有する彫刻師の手による、スペインおよびラテンアメリカの造形的特徴を保持している

様式。ルネサンスからロココに至るまでの、とりわけバロック期の西欧の芸術様式を踏襲しており、同時に装飾のモチーフや衣類の表現には中国からの影響も認められる。広範なカテゴリーがこの様式には含まれており、フィリピンにおけるサントの様式の「典型」とされている。多くの特徴が外来の技術・文化に由来しているが、単なる異文化のコピーではなく、フィリピン独自の特色もその様式の中に認められる（図6）。

#### 【装飾の様式】

古典の様式とほぼ同様の芸術の影響下に形成された様式だが、スペインにおけるバロックおよびロマン主義の様式からの特に強い影響が認められ、細部を豊かにかつ現実的に装飾することにより強い関心が示されている。装飾の様式には二つの異なる素材カテゴリーがあり、一つは「象牙彫」(Ornate ivories)、いま一つは「木彫」(Ornate wood sculpture)である。前者にはさまざまなヴァリエーションがあり、全身が象牙製のものもあれば頭部や手足など一部分だけが象牙製のものもある。どちらも目玉には彩色したガラスを用いるのが一般的である。衣装の装飾には金銀の豪華な刺繍が施されることもあった。これらの装飾の様式のサントは、早くとも18世紀後半以降、そのほとんどは1800年以降に制作されたものだと考えられる（図7）。

## 5. 聖ロクスのサント

サントの主題には、その起源とされているサント・ニーニョはもちろんのこと、聖母マリアやカトリックの聖人たちも選ばれている。イエス・キリストや聖母マリアのサントが人気であることは云うに及ばないが、聖人のサントとしては、フィリピン人信徒の心性により近い来歴・聖性をもつ聖人がより好まれている。たとえば、大天使ミカエルや農民聖イシドロ（マドリッドの聖イシドロ）はサントの主題としてしばしば選ばれており、前者は略奪者たちからの加護が、後者は日々の農業に対する加護



図5  
《聖人像（無原罪の御宿り？）》（民衆の様式）  
制作年不詳／作者不詳／木彫



図6  
《聖母マリア像》（古典の様式）  
制作年不詳／作者不詳／木彫



図7  
《聖母マリア像》（装飾の様式）  
制作年不詳／作者不詳／木彫、シルクに金糸



が、それぞれ期待されている聖人である<sup>25</sup>。そしてこの二者に並んで、聖ロクスもまた、フィリピンのサントとして人気の主題であった。

聖ロクス（そしてそのサント）がフィリピン人信徒たちの間で多くの崇敬を集めていたことは、聖ロクスのサントが数多く遺されていることから明らかなであるが、聖ロクスが疫病の守護聖人であったことから容易に推測できる。たとえば、聖ロクス像の一つ（図8）が制作された南イロコスでは、19世紀後半から20世紀前半にかけて、コレラや腸チフスなどの疫病が連続的に発生していたと言われていた<sup>26</sup>。また、聖ロクスは狂犬病の守護聖人としても認識されており、フィリピンは現代でも狂犬病の発症例が多い国として知られている。以上の背景を考慮すれば、聖ロクスの加護を求めるフィリピン人信徒が何世紀にもわたって数多く存在していたであろうことは想像に難くない<sup>27</sup>。

造形の観点から聖ロクスのサントについて言えることは、まずもって、民衆の様式が圧倒的に多いということである。厳密な統計データが存在するわけではないが、少なくとも先行研究で紹介されている聖ロクス像は、そのほとんどが民衆の様式であり、他の様式の例が挙げられることは稀である。その理由としては、聖ロクスが教会の司祭・宣教師たち以上に民衆の間で人気を得ている聖人だからではないかと推測される<sup>28</sup>。

次に、造形的特徴に注目すると、聖ロクスのサントには以下の三つの要素が典型的特徴として見出される。第一に、左足の太ももの傷（ペスト患者の証である黒痣）を指し示している点。ただし、誤って右足に傷が描かれているケースもある<sup>29</sup>。第二に、天使ないし犬（ゴツタルドの猟犬）という同伴者を伴って制作されることがあるという点。ただし、伝承の過程で同伴者部分が分離されてしまうこともある。また、犬の造形・色彩は統一されていないことが研究で指摘されている<sup>30</sup>。第三に、正面性が強調されている点。つまり、多くの聖ロクス像は、この像へ祈願する信徒と正面から向き合うような造形となっている。

第一の点と第二の点は、聖人伝および西洋美術の伝統に由来する特徴である。第三の点は、民衆の様式のサント全般にしばしば見出される特徴であり、おそらくこの特徴は、家庭用の小さな祭壇に祀られる——つまり、所有者である個々人の信徒と親密な距離にある——聖像という、用途に由来する特徴であろう。むろん、時代と様式の変遷に応じて造形もさまざまに変化するが、以上の三要素は聖ロクスのサント一般に共通して見出される特徴であると言える（図8-11）。

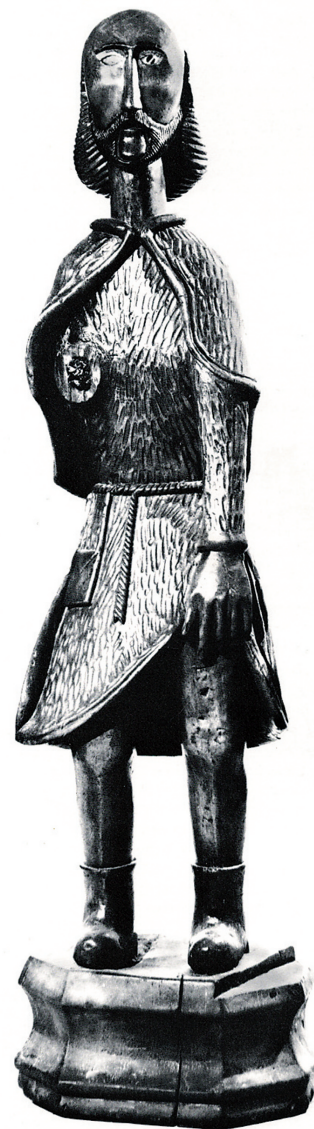


図8  
《聖ロクス像》（民衆の様式）  
制作年不詳／  
作者不詳（南イロコスの職人）／木彫



図9  
《聖ロクス像》(民衆の様式)  
制作年不詳 / 作者不詳 / 木彫



図10  
《聖ロクス像》(民衆の様式)  
制作年不詳 / 作者不詳 / 木彫



図11  
《聖ロクス像》(装飾の様式)  
制作年不詳 /  
作者不詳 (バンガシナンの職人) / 象牙彫



## 6. 西南学院大学博物館所蔵「聖ロクス像」の特徴

それでは最後に、西南学院大学博物館が所蔵する「聖ロクス像」(図12-13)の特徴について確認していきたい。

19世紀にフィリピンで制作されたとされているこのサントは、素朴な造形をした木製の聖像である。完全な一木造りではなく、胴体と四肢のパーツが継ぎ合わされて制作されており、そのような脆い構造ゆえに右手と両足の部分が失われてしまっている(図14-15)。また、複数の色の顔料によって全身に塗装が施されているが、多くの部分が完全ないし不完全に剥落しており、鼻や頭頂部は元々の木材が露出している(図16)。彫刻や彩色の粗さから考えて、様式は「民衆の様式」に分類される。

聖ロクスのサントに共通する三つの共通要素のうち、「太ももの傷を指し示していること」と「正面性が強調されていること」の二点は明確に見て取ることができる。同伴者を伴っていない点は、元々は犬ないし天使と一組で制作されていたが伝来の過程で散逸してしまった可能性が考えられる。ただし、足元の台座ごと散逸してしまった現在では、元々単独であったのか、同伴者を伴っていたのかを推定することは難しい。

赤い顔料で胸に描かれている十字架(図17-18)は、おそらくこのサントの最大の特徴である。先行研究で紹介されている聖ロクスのサントには、胸に十字架が刻まれているものが皆無であり、そもそも身体に十字架の図像が描かれた聖ロクス像の作例自体が研究で指摘されていない。したがって、この「胸の十字架」という図像的特徴は、決して一般的でないと考えられる。むしろ、本論第1章で確認したように、十字架のしるし自体は聖人伝に由来するものであり、このサントの制作者の独創ではない。もっとも、聖人伝では「左肩」とされていたにもかかわらず「胸」に変わっており、この点はこのサントの制作者による勝手な改変であろう。

ではなぜこのような改変が行われたのだろうか。

可能性としては二つ考えられる。一つは、制作者が聖人伝を詳細に把握しておらず、聖ロクスの身体に刻印された十字架の位置を知らなかったという可能性である。十字架が描かれた聖ロクス像の作例がフィリピンにおいて一般的でないという事実に鑑みれば、これは十分に考える可能性である。いま一つは、肩よりも胸に描く方が「効果的」だったからという可能性である。効果的というのは、祈願する信徒の信心をより強く喚起するという意味であり、聖像や聖像画の多くが正面性を強調して制作されるのと同様の理由である。むしろ、これらの可能性は二者択一ではなく、十字架の位置を知らなかったゆえにその位置を自由に想像し、サントの機能を考慮した結果、胸に描くのが最も相応しいという結論になったのだ、と推測することもできよう。

サントの背面にも注目すべき特徴が見て取れる。それは背中に打ち込まれた釘(留め具)である(図19)。この釘はサント一般に見られるものではない。というのも、サントは通常、自立できるように制作されており、背面から紐等で固定する必要がないからである。もしこの釘が見た目通りサントを固定するためのものであるとすれば、それが付けられた理由として二つの可能性が考えられる。一つは、制作当初から自立に懸念があったため、予備の固定具として制作者の手により打ち込まれたという可能性である。いま一つは、サントの足(台座)の紛失か、あるいは家庭用祭壇の問題ゆえに、サントを自立させられなくなった所有者の手により打ち込まれたという可能性である。どちらの可能性も考えられるが、いずれにせよ、この釘は、この聖ロクス像が——自立できないにもかかわらず——実際に聖像として祭壇に祀られ、信心の対象となっていた事実を示唆する重要な「痕跡」であると言えよう。

## おわりに

サントという「信仰の道具」は、フィリピンにおいて長い伝統があるものの、フィリピン国外ではほとんど知られていない。Ayalaの論文をはじめとす



図12  
《聖ロクス像》(正面)



図13  
《聖ロクス像》(背面)



図14  
右腕部拡大図



図15  
脚部拡大図



図16  
顔面拡大図





図17  
胸の十字架



図18  
十字架拡大図



図19  
背面の釘（留め具）

る20世紀後半以降のサント研究の成果はその状況をわずかに変えつつあるかもしれないが、研究者の間でさえ国際的な知名度を獲得しているとは言い難いのが現状である。

その一方で、コレクターやバイヤーの手を通じてフィリピン国外にサントの実物が持ち出されているのも確かな事実であり、その実例の一つが西南学院大学博物館の所蔵する「聖ロクス像」である。未だ発展途上であるサント研究において、資料の実物を有していることは大きな利点である。この利点を無駄にしないためにも、更なる調査研究と継続的な収集活動を行うことが西南学院大学博物館には求められるだろう。

#### 註

- 1 西南学院大学博物館が所蔵するサントについては、本論文の補遺「西南学院大学博物館のサント・コレクション」を参照。
- 2 フィリピンの美術市場においてサントが注目を集めたのは20世紀後半からであると考えられる。フィリピンの美術史家Esperanza B. Gatbontonは1979年に刊行した研究書において「過去15年にわたってフィリピンのコレクターたちはサント像に大きな注目を寄せ続けている」と述べている。Cf. Esperanza B. Gatbonton, *A Heritage of Saints: Colonial santos in the Philippines*, Manila/Hongkong, Editorial Associates, 1979, p. IX.
- 3 管見の限りでは、日本において開催されたサントをテーマとする展覧会は「フィリピンの聖なる像 サント」(福岡アジア美術館、2003年)のみである。また、展覧会にサントを出品している展覧会としては、「境界は出会いの場 非西欧圏のキリスト教文化」(西南学院大学博物館、2008年)、「信仰の歴史 キリスト教の伝播と受容」(西南学院大学博物館、2016年)、「キリスト教の祈りと芸術 装飾写本から聖画像まで」(西南学院大学博物館、2017年)、「聖母の美 諸教会におけるマリア神学とその芸術的展開」(西南学院大学博物館、2019年)などが挙げられる。
- 4 フォーク・カトリシズムについては以下の文献を参照。Antoine Vergote, "Folk Catholicism: Its Significance, Value and Ambiguities," *Philippine Studies*, 30(1), Ateneo de Manila University, 1982, pp. 5-26.
- 5 邦語論文のうち、サントに間接的に関連するものとして、次の論文が挙げられる。梶原景昭、宮坂敬造「セブ市のサント・ニーニョ信仰——フィリピン地方都市研究の可能性」『民俗学研究』第43巻第3号、1983年、379-386頁。
- 6 Donald Attwater, *The Penguin Dictionary of Saints*, Penguin books, 1965, p. 299.
- 7 テキストは次の版を参照した。Jacobus de Voragine, *The Godlen Legend or Lives of the Saints as Englished by William Caxton*, vol. 5, London, J.M. Dent & Sons, 1900.
- 8 *Ibid.*, pp. 1-2.
- 9 *Ibid.*, pp. 3-4.
- 10 *Ibid.*, pp. 6-7.
- 11 *Ibid.*, pp. 9-12.
- 12 Pierre Bolle, "San Rocco di Montpellier: Una Lunga Ricerca Tra

Archivi, leggende e Nuove Scoperte," Paolo Ascagni e Nicola Montesano ed., *San Rocco di Montpellier: Studi e Ricerche*, Atti delle Giornate Internazionali di San Rocco (Caorso e Cremona, 2-3 ottobre 2009), Tolve, CSDSD, 2015, p. 17; Paolo Ascagni, *San Rocco contro la Malattia: Storia di un Taumaturgo*, Milano, San Paolo, 1997, pp. 18-20.

- 13 Pierre Bolle, *op. cit.*, pp. 7-56.
- 14 聖ロクス崇敬の成立時期についての研究は以下の文献を参照。Paolo Ascagni, *San Rocco contro la Malattia: Storia di un Taumaturgo*, Milano, San Paolo, 1997, pp. 98-112; Louise Marshall, "A New Plague Saint for Renaissance Italy: Suffering and Sanctity in Narrative Cycles of Saint Roch," J. Anderson ed., *Crossing Cultures: Conflict, Migration, Convergence*, Melbourne, Miegunyah Press, 2009, pp. 543-549; Pierre Bolle and Paolo Ascagni, *Roch of Montpellier: Voghera and His Saint*, translation by Gina Torreggiani, Italian Association Saint Roch of Montpellier Center For Studies on Saint Roch - International Committee, original text 2001 (revised 2010), pp. 21-23.
- 15 聖ロクス表象の類型について、「患者」と「治癒者」の二側面から分類できるという観点は、河田淳「太もの「傷」——15世紀末イタリアにおける聖ロクス信仰の発展」、『ディアファネース 芸術と思想』第3巻、2016年、83-104頁を参照した。
- 16 Gabriel Casal, et al., *The people and Art of the Philippines*, Los Angeles, Museum of Cultural History, University of California, 1981, p. 85.
- 17 *Ibid.*, p. 88.
- 18 Begalado Trata Jose, "Santos: Philippine Images of the Sacred," 『フィリピンの聖なる像 サント』所収、福岡アジア美術館、2003年、33頁(邦訳は同書、15頁)。
- 19 Casal, et al., *op. cit.*, pp. 94-98.
- 20 *Ibid.*, p. 94.
- 21 Fernando Zóbel de Ayala, *Philippines Religious Imagery*, Ateneo de Manila, 1963, p. 10.
- 22 Cesar Adib Majul, "Anticlericalism during the Reform Movement and the Philippine Revolution," Gerald H. Anderson ed., *Studies in Philippine Church History*, Ithaca/London, Cornell University Press, 1969, pp. 152-171.
- 23 19世紀から20世紀にかけてのフィリピンにおけるカトリシズムの変化については次の文献を参照。宮脇聡史「『キリスト教国フィリピン』の現代カトリック協会の社会観・社会関与——その教会観との関わり」、『キリストと世界』第13巻、2003年、1-22頁。
- 24 Fernando Zóbel de Ayala, "Philippine Colonial Sculpture: A Short Survey," *Philippine Studies*, 6(3), 1958, pp. 257-62; Idem, *Philippines Religious Imagery*, pp. 25-33; Gabriel Casal, et al., *op. cit.*, pp. 94-98; Regalado Trota Jose, *Images of Faith: Religious Ivory Carvings from the Philippines*, Pasadena, Pacific Asia Museum, 1990, pp. 21-22.
- 25 『フィリピンの聖なる像 サント』福岡アジア美術館、2003年、9頁の資料解説を参照。
- 26 同書、10頁の資料解説を参照。
- 27 フィリピンにおける聖ロクス崇敬については次の文献を参照。Gatbonton, *op. cit.*, pp. 111-112.
- 28 Gatbontonは聖ロクス像の典型的傾向について「我々が彼(聖ロクス)を教会の『公的な』像として見ることは稀である。大抵の場合、彼の像は小さく、家庭用の大きさに、個人的な信心のために作られた類型のものである」と指摘している。Cf. Gatbonton, *op. cit.*, p. 115.
- 29 Gatbonton, *op. cit.*, p. 114.
- 30 Gatbonton, *op. cit.*, pp. 112-113.



## 引用図版出典一覧

- 図1 《聖ロクスと天使》  
St Roch and the Angels  
1480年／バルトロメオ・ヴィヴァリーニ／板絵  
サンテウフェーミア、ヴェネツィア  
出典：Web Gallery of Art (<https://www.wga.hu/index.html>)
- 図2 《聖ロクスと天使》  
St Roch with the Angels  
1545年頃／マッテオ・ダ・ブレシア／キャンバスに油彩  
ブダペスト国立西洋美術館、ブダペスト  
出典：Web Gallery of Art (<https://www.wga.hu/index.html>)
- 図3 《ベスト患者をいやす聖ロクスと栄光の聖母》  
St Roche among the Plague Victims and the Madonna in Glory  
1575年頃／ヤコポ・バッサーノ／キャンバスに油彩  
ブレラ絵画館、ミラノ  
出典：Web Gallery of Art (<https://www.wga.hu/index.html>)
- 図4 《天使に孤独を慰められる聖ロクス》  
St Roch in Solitude Comforted by an Angel (detail)  
1580年／パオロ・フィアミンゴ／キャンバスに油彩  
サンロッコ、ヴェネツィア  
出典：Web Gallery of Art (<https://www.wga.hu/index.html>)
- 図5 《聖人像（無原罪の御宿り？）》（民衆の様式）  
Unidentified Saint; possibly an Inmaculada Concepcion  
制作年不詳／作者不詳／木彫  
Locsin collection  
出典：Philippines Religious Imagery
- 図6 《聖母マリア像》（古典の様式）  
Apocalyptic Virgin usually associated with the Franciscan Order  
制作年不詳／作者不詳／木彫  
Araneta collection  
出典：Philippines Religious Imagery
- 図7 《聖母マリア像》（装飾の様式）  
Praying Virgin standing on a "pandan" palm  
制作年不詳／作者不詳／木彫、シルクに金糸  
Florentino collection  
出典：Philippines Religious Imagery
- 図8 《聖ロクス像》（民衆の様式）  
St. Roch  
20世紀前半／作者不詳（南イロコスの職人）／木彫  
サン・アグスティン博物館  
出典：The people and Art of the Philippines
- 図9 《聖ロクス像》（民衆の様式）  
St. Roch with Dog  
制作年不詳／作者不詳／木彫  
出典：A Heritage of Saints: Colonial santos in the Philippines
- 図10 《聖ロクス像》（民衆の様式）  
St. Roch with Angel  
制作年不詳／作者不詳／木彫  
出典：A Heritage of Saints: Colonial santos in the Philippines
- 図11 《聖ロクス像》（装飾の様式）  
St. Roch with leather halo and decorated garment  
制作年不詳／作者不詳（パンガシナンの職人）／象牙彫  
出典：A Heritage of Saints: Colonial santos in the Philippines

\* 図12-19は所蔵資料の撮影写真のため割愛。

補遺 西南学院大学博物館のサント・コレクション



補遺図1  
《聖母マリア像》  
Statue of Madonna  
19世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-001



補遺図2  
《聖母マリア像（戴冠の聖母）》  
Statue of Madonna  
19世紀／フィリピン／木彫、ブリキ  
資料番号：C-a-002



補遺図3  
《無原罪の御宿りの聖母像》  
Statue of the Immaculate Conception  
18世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-003



補遺図4  
《教皇像》  
Statue of the Pope  
19世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-004



補遺図5  
《修道士像》  
Statue of the Friar  
19世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-005



補遺図6  
《修道士像》  
Statue of the Friar  
19世紀／フィリピン／木彫（頭部は骨製）  
資料番号：C-a-006





補遺図7  
《大天使ミカエル像》  
Statue of Michael the Archangel  
19世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-008



補遺図8  
《サント・ニーニョ像》  
Statue of Santo Niño  
19世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-009



補遺図9  
《聖ロクス像》  
Statue of St. Roch  
19世紀／フィリピン／木彫  
資料番号：C-a-010

## サント関連資料



補遺図10  
《聖フランシスコ・ザビエル像》  
Statue of St. Francisco Xavier  
18-19世紀／ゴア（インド）／木彫  
資料番号：C-a-007

本資料はフィリピンではなくインドで制作された聖像であるため、サントの定義には当てはまらない。しかしその民芸的特徴や西欧の宣教師によってもたらされたと思われる技術的・造形的起源はサントに類似しているため、サント関連資料として位置づけた。